



TITLE:

星座の歌

AUTHOR(S):

平松, 閑月

CITATION:

平松, 閑月. 星座の歌. 天界 1930, 10(114): 359-364

ISSUE DATE:

1930-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161572>

RIGHT:

星 座 の 歌

九十翁 平 松 閑 月

閑月讀める歌の趣意

1. 星座の歌を骨牌となして、其の歌によつて、星座の名と星座の位置とを譜記するを主とするが故に、假令ばペルセウスの歌を読むには、其の歌の内へ力めて、其の星座の周圍に接したる星座＝三角、カシオペア、アンドロメダ、羊、牛、馭者、麒麟等を成丈け讀み込む、左すればペルセウス星座の周圍には、右七星座が接して居るといふ事を、自然に譜記するに至る。依つて歌の巧拙とか、品格とかいふ事には力を入れないのである。或は歌を巧に讀まむとして、其の位置を知るによしなきを以つて、假令歌は幼稚、下品なるも、是をいとはず、隣接の星座を讀み込むことにした。夫れから其の分の星座の右傍に、● 此の印を付し、其の歌の主星座を知らしめ、其の隣接の星座には同右傍に ○ 此の印を付して、主星座と隣星座との區別をした。
2. 大庭濱子女史の作歌を拜讀するに、同女史は歌人にして、天文學に通曉せられ、此の九十の星座中六十餘首、何れも敬服せざるはない。残る二十餘星座へ閑月二十星座ばかり物せしも、和歌としては詞下卑、又狂歌としては面白みが無い。只探る所は星座と星座の位置を知る而已である。

昭和五年七月中の頃

閑 月

天文同好會幹事 水野千星殿

————— × —————

1. 麒 麟 星 座

北極を 麒麟まわりて 南天に 鳳凰のまふ 御代ぞしづけき

2. 一 角 獸 星 座

一角の 突くこゝろだに なかりけん 大犬小犬 も友としぬれば

3. 小 犬 星 座

天の原 遊ぶ小犬を あはれにも 一角獸の 今突かむとす

4. 鱸 星 座

鱸をこぐも 帆を揚ぐるにも 荒浪に 羅針盤さへ 据りかねたる

5. 飛 魚 星 座

天の川 浪を蹴てとぶ 飛魚は そらひるがへる 燕とや見む

6. 山 猫 星 座

山猫が 蟹を獲らんと にらむとも 隣の獅子座 ゆるすべきかは

7. 帆 星 座

帆をおろし いづこをさして 漕ぎ行かむ 天の川浪 荒くたつれば

8. 小 獅 子 星 座

獅子といへば 吼ゆる聲だに 怖ろしも 乳兒の小獅子は いとも愛らし

9. 海 蛇 星 座

海蛇は 廣きみ空を うね廻る 南天東西 長さ百餘度

10. コ ッ プ 星 座

南天の コップ星座に 盛る水ば 天の乙女の 化粧水かも

11. 鳥 星 座

一聲を 年の初影 めでぬるは 天津みそらの これの鳥か

12. 獵 犬 星 座

天體の 獸類狙ふ 獵犬も 大熊星には尾をはさみたり

13. 兩 脚 規 星 座

天體を 測量中か 兩脚規 セキスタントや オクタント見ゆ

14. 狼 星 座

狼も 蝎と海蛇に とり卷かれ 一聲うなる 勢もなし

15. 蛇 星 座

生物を 皆一呑みの 蛇さへも 蛇遣ひには 身をまかせつゝ

16. 定 規 星 座

天體を 九十星座に 定めしは 定規コンパス もて測りけむ

17. 風 鳥 星 座

足なくも 廣きみそらを 風鳥の 風のまにまに 飛び廻らむ

18. 楯 星 座

いにしへに 用ひし楯も をさまりて み空にさゝぐ 御代ぞかしこき

19. 孔 雀 星 座

巨^〇嘴^〇鳥^〇や 風^〇鳥^〇星^〇座^〇に 護られて いと派手やかに 孔[・]雀[・]舞[・]ふらむ

20. 八 分 儀 星 座

八[・]分[・]儀[・] もて測りけん 限りなき み星^〇み星^〇の 其^〇の座^〇其^〇の座^〇を

21. 蜥 蜴 星 座

天津空 汽車自動車の 便利なく 蜥[・]蜴[・]匍[・]匍[・]ふ さまぞをかきし

22. 巨 嘴 鳥 星 座

鶴^〇の足 鳳^〇凰^〇の尾の 長きにも なほまさりぬる 巨[・]嘴[・]鳥[・]のはし

23. 彫 刻 室 星 座

天體の 星座の下圖 調ひて 彫[・]刻[・]室[・]へ 送りけるかな

24. 鳳 凰 星 座

鳳[・]凰[・]の み空^〇をゆたかに 舞ふなべに 鶴^〇も千代よぶ聲をそふらむ

25. 三 角 星 座

オ^〇ク^〇タ^〇ント^〇 以て觀測 なしぬらむ 北天高く 三[・]角[・]の見^〇ゆ

26. 羊 星 座

逃け去りし 妻を慕ふか 牡[・]羊[・]の黄道縁を 辿るあはれさ

— × —

附 記 天界本年三月號で發表したところの「星座かるた」は一星座、一首を要求するものである。然るに大庭濱子女史の「星座百首」中には、數星座を一首に讀み込まれたものがあるので、これを一星座一首にと、同女史に願つたが御多忙なと、御謙遜されるので、如何にせんかと苦心した。唯の歌人では星座の歌は六ヶ敷い、そこで天文の心得ある人で歌の咏める人は誰れかと物色した結果、白羽の矢は、九十翁閑月老に向つた。去七月二十七日に翁の閑居を訪ひ、御依頼したところ、快諾されたので安心した。しかし残り全部はとても不可能だ。出来るだけ御助力すると申されたが、八月十五日附で殆んど全部に亘つたものを郵送された。残り二、三首は小生がぬたくり、目下翁に添削を願つて居るのである。

閑月翁米壽記念揮毫書頒布會が 去昭和三年三月催されたときに有志者が物された翁の履歴は下記の通りである。

平松誠一字は信孝、對岡庵閑月は其の號なり。天保十二年三月二十七日を以て、舊都宇郡下庄村に生る。幼時醫師平野業平に就きて漢學を修め、後數學に志し自習すること數年。安政六年正月始めて吉備郡總社の和算家藤田秀齊の門に入り、元治三年三月更に京都司天官司教福田理軒に師事し、測天測地の法を研鑽し、遂に曆術を授かる。曆日交蝕を推歩したる著書尠少ならず。明治三年五月東京數學專門學校順天求合社に入り、日夜研究して業大いに進む。明治四年十一月小田縣に奉職し、維新地租の改正に際し同縣管内備中一圓、備後六郡の測量及び丈量に従事し、ついで同縣より陸軍省に提出の管内全圖調製の任に當りしより、同門佐伯義門と共に之れを完了し、八年十二月高知縣民の依頼に應じて職を辭し、門下の技術員八百五十餘名を率ゐて同縣に至り、尙ほ同縣地租改正係の指揮により、同縣有志者に測量の技術を教授し、其の徒を合せて、土佐全國に配置し、測量の速成を策せり。續いて豫讃阿の三國に跨り、土佐國と同一方針を採り、殊に讃岐國には高松に出張所を設け、其の他各所に教授所を置き、専ら技術を教導せり。十年一月岡山縣に奉職し、測量に従事すること數年。後徳島縣公平社の聘に應じて其の技術長となる。二十年日本土木會社に入り、山陽鐵道豫測に従事し、山陽鐵道株式會社成立後直ちに同社に聘せられて技士となる。二十七年轉じて伊豫別子銅山鐵道の測量及び工事に従事し、二十八年以後南和鐵道、阪鶴鐵道等の各會社に轉職し、三十一年二月再び岡山縣に奉職すること數年後中國鐵道吉備線敷設の舉に際し、三十七年一月聘せられて技士となる。竣工後神戸郵便管理局測圖手を拜命して、該通信實測地圖を調製せり。三十九年兒島郡味野町野崎家火防水道敷設工事に従事し、竣工後四十年藤田組合名會社兒島灣開墾事務所に勤務し、該既成開墾地幾千町歩の住民飲料水、水道延長三里に亘り設計布設をなせり。此の外關係事業枚舉に遑あらず。業務の旁ら教授せるもの一千有餘名。其の生國＝播磨、備前、備中、備後、安藝、長門、丹波、伯耆、出雲、石見、讃岐、伊豫、土佐、阿波、山城、大和、伊勢、遠江、武藏、上總の二十ヶ國に亘り、明治三十九年七月文部省帝國學士院に於て、和算史編纂の議あり、大正元年十月

同事業囑託員遠藤利貞、本縣に出張し一日翁の庵を訪ふ。茶話頃刻掌を打つて曰く、方今我が國和算の蘊奥を談すべきもの獨り翁あるのみと。帝國學士院に翁の著書を寄附せるもの一夢集十三冊、測量手引草初稿一冊、算法便書稿一冊、星圖二帳、弘化元曆六冊、最上流和算書二冊、同諸表用法一冊、算法點竄愚解一冊、算法翦管術解一冊、算法築術方程渾沌兩招差解一冊、弘化元曆交蝕推歩一冊、曆術秘傳書三冊、大藏省出版水驗器用法略に詳解をなせしもの一冊、吉備津神社奉額題解一冊、算法釣術淺問集一冊、應天曆一冊、同推歩一冊、同交蝕推歩四冊、實用水理(十川工學士著)全部詳解一冊、平三角及孤三角術用法解並にセキスタント視差解合本一冊、天體觀測圖一帳、算法綴術一冊、算法趕趁術一冊、算法綴術用法一冊、算法極數術起源一冊、等あり。院長菊地大麓其の學識に感じ、目するに隠れたる博士を以つてすといふ。又犬養木堂大人は扁額に「算經宗師」又聯幅に「算經一部究天究地、繼百代垂統文學」といへり。また以て翁の學識の深淵なるを推知するに足らん。翁晩年の著述少なからず。尙ほ學士院に寄附したる外、測量集成十一卷、宮島旅行記一卷、東京見物十一卷、數學藝術殘々稿集十一卷、一興集十五卷、座右の友一卷、皆木堂大人の序文のあらざるはなし。外にまた同翁の年譜三卷あり。近年京都帝國大學天文臺内天文同好會岡山支部水野幹事の賛成を得て「天文うるまなび」てふ書を著はさんとす。實に其の精力絶倫といふべし。

翁雅道に志あり、岡直廬、佐々木元孫に和歌を學び、旁ら狂歌、俳道を嗜み、大正十五年五月 皇太子殿下岡山縣に行啓の際、和歌を献上するの光榮に浴したり。現今都窪郡早島町矢尾に住し光風齋月を樂み本年米壽の高齡に達し、今尙ほ矍鑠として壯者を凌ぐの慨あり。

— × —

翁をその庵に訪ふたこと、既に數回、實に余の苦手である。とても太刀打ちが出来ない。今日に至るまで、世界中の大事件は新聞を切抜いて、整理し保存されてある。大字、細字に巧みに、日記を詳細に認められ、

その綿密なること驚くの外はない。又火星の運行を日々観測して、順行逆行、留等の月日を記さるゝ等實にその學究的態度敬服々々。

又かつて彗星の軌道について論ぜられ、彗星は行く行く、恒星に捕へられては、離れ離れては、又捕へられ、宇宙を漂流するものと唱へられ、何日ぞやは神田理學士の著「彗星」を通讀されたこともある。

宇宙は有限か、無限かとの問題で大に論じたことがあるが、これを究めて置かねば、死んでも道を迷ふとてそれはそれは熱心なこと驚くの外はない。

昭和五年八月二十七日

水 野 千 里 記す

「宇宙が小さくなつた」といふ説について

去る九月七日の英文毎日と、翌八日の大阪毎日及び東京日日新聞は、米國シカゴ電報として、

『宇宙空間に光線を吸収する物質が見付かつたので、今までの宇宙の大きさはもつと小さく考へられなければならぬ』

と言つたやうなセンセーショナルな記事を載せた。ニウスの根元は九月上旬シカゴで開かれた米國天文學會第44回總會で、ヴァージニア大學天文臺のヴァン・デ・カンブ Van de Kamp 氏が發表した論文である。しかし、上記の三新聞中、最も正しい記事を載せたのは英文毎日であつて、他の二つは何れも數字の譯を誤り、コツケイな失敗をしてゐた。即ち宇宙の縮まりは

東京日日(九月八日)

大阪毎日(九月八日)

英文毎日(九月七日)

1,000,000,000,000,000哩

“千億哩の一千倍”

“hundreds of quadrillions”

換言せば

1,000,000,000,000,000哩 100,000,000,000×1000哩. 1,000,000,000,000,000×幾百哩

尤も詳しい事はヴァンデカンブ氏の論文を見てからでないと分らないが、とにかく、トラムプラー、ヴァンデカンブ氏等が一兩年前から斷片的に發表してゐる數字に照して見ると、ほゞ想像がつく。

いづれ、二三ヶ月の後、事の真相を「天界」誌上に記することゝする。